
AngelBeats! Another peace story

中原 千波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Beats! Another peace story

【Nコード】

N9684V

【作者名】

中原 千波

【あらすじ】

転生したあとそれぞれの物語

Ifの死の世界

運命と約束と（前書き）

転生したあとも戦線にいても続いて欲しい愛がある！！

なんて思ってしまったて書いてしまったわけですが・・・

ゆるゆる見ていただければ幸いです（；；）

キャラが多少・・・いやかなり違う気がする・・・すいません。

運命と約束と

「お前料理克服しろ」「ええっそんな一方的に命令しないでください!!」「」

1LDKの小さなアパートで、いつものように言い合う二人の男女。この二人が一緒に住み始めたのはもう2年前からだ。

――2年前――

学校の屋上に1人、柵によりかかる男子生徒

「俺ももうすぐ卒業かぁ・・・つぐおっほぉ」
後ろからドタドタ走って来た女子生徒は綺麗にプロレス技を繰り出す。

「先輩、何しんみりしてるんですか？あつ私と離れるのが寂しいんですねえ」

「・・・っ痛えな。お前普通にはなしかけらんねえのか？いきなりリアットしやがって」

「だって先輩柄にもなく辛気臭い顔して・・・まるで消えそうな・・・」

「・・・はあ？死んでもないのに消えるわけないだろ・・・ただこれからどうすつか考えてたんだよ」

「これから？」

「ああ。俺もうすぐ卒業だったのに進路も何も決めてねえ。．．．これでいいのかってな。」

「．．．何、言ってるんですか、先輩。」

「え？」

「先輩、忘れちゃったんですか？あの約束。」

「約束？」

「私と．．．結婚してくれるって．．．言ってくれたじゃないですか！！．．．ずっと、ずっと一緒にいてくれるって言ったじゃ．．．．．なっ．．．いですっふええ」

言い終わる前に強く抱き寄せる日向。

「ごめんな、違う．．．そうじゃない。お前とは絶対結婚する！幸せにしてみせる！．．．そう、あの時誓ったんだ．．．けど大切な奴を、ユイを守っていくには不甲斐ないって言うか．．．その．．．ええと．．．」

途端に体を震わせるユイ。

「．．．ふふっなんてね やだなー先輩なに必死になってるんですかー」

涙の跡を残して笑うユイ。

「・・・分かってますよ。先輩がどれだけ私を大事にしてくれてるか・・・でも心配になっちゃって、先輩が私の傍にいてくれるのは『償い』なんじゃないかって・・・」
はつとしたように彼女を見つめる日向。

そう言っただけを見つめながら寂しそうに笑うユイ。

まだ2人が出会って間もない頃、野球の練習試合をしていた日向は打ったボールが誤って、歩いていたユイに当たってしまった。ボールはユイの目に当たるかギリギリのところだった。幸い大事にはいたらなかったが傷は残ってしまっていた。日向はユイとユイの母親に何度も謝罪して自分がユイをこれから守っていくといいユイの傍にすることを誓った。

「・・・確かに最初は償いだった。お前に怪我させた拳句傷まで残して、責任とらなきゃってな。でもな、償いから始まった関係でも、俺はお前のことを疎んじたこととはない。」

「・・・今だから言うが・・・俺、始めて会った時から・・・お前のこと・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・好きだったんだぜ？」

真つ赤より赤い顔をした日向は凄く照れくさそうにそういった。

「・・・・・・・・あああー何言ってるんだ俺。」

うずくまる日向を見てユイは・・・・

例の関節技を決めていた。

「ふふん、聞いてちゃいましたよ？せんぱーいゆいにゃんの魅力に
メロメロだったんですねえ、
もつと褒め称えろゴラあああ」

「いでででちよつおま・・・・・・・・死ぬ・・・・・・・・ってかいきなりなん
だよ！・・・・・・・・ひとがせつかく素直に・・・・・・・・さっきまで泣いてたく
せによお」

「問答無用っ！！うりゃああああ」

「ぎゃああああああああああ」

だってね、先輩。私だって先輩のこと大好きなんだよ？多分私たちはずいぶん確立で出会った。・・・
そんな気がする。ずっと前から決まっていたみたい。

思い出せないけど、私達きつとどこかで出会っていた。そしてまた出会えた。

奇跡じゃ・・・ないよね。

まだまだいろいろなことが、ある・・・かもしれない。

なんてな。

運命と約束と（後書き）

大好きです！！このふたりはもおお可愛すぎて・・・

作者の顔が暑い・・・

ちよつと23：50分の歌詞に合わせてみようかなあとおもいました。

確かなモノ（前書き）

引き続きバカップルのおはなしです。

作者の顔が緩みっぱです汗

確かなモノ

「俺と、一緒に住まないか？」

「・・・ふえ?! なんですかっいきなり!」

――3月7日卒業式――

式が終わり卒業証書を受け取った卒業生達は、それぞれ友達や後輩と互いに別れを惜しんでいた。

その中に他とは違う空気の集団がいた。

「・・・お前、やっちゃまったな」

「you are crazy!」

「いやー僕びつくりして、口から肝臓でちゃうかと思ったよ」

「お前、それ心臓な」

日向、TK、大山、藤巻の順にツッコミを入れられている目付きの悪い少年。

「・・・ふっ俺の魂の籠った言葉にきつとゆりっ・・・うごほお
おお」

真正面から回し蹴りを食らった哀れなバカは見事に吹っ飛んだ。

「おっご本人登場じゃん」

「つつるさい!!」

「日向君、あなたとっと消えてくれないかしら」

「いきなりひでえな・・・」

「いいからてめえらっせろおおお」

哀れなバカを取り残して退散していく4人。

「全く、素直じゃねえな」

「まあそれがゆりっぺだから」

「あのバカ上手くやれんのか？」

「さすがに今日ぐらい報われねえとかわいそうだろ」

「I
k
i
s
s
y
o
u
!」

廊下にも生徒が集まっていて通ることも一苦労だった。

「たかが卒業式で、泣くこたあねえだろ」

ぶつくさと言つ藤巻。

「んなこと言っ
て、ほんと
は寂しいん
だろ？」

「は？俺は別に・・・」

にやにやしながら日向は小声になる。

「……ひさじとどうなんだよ」

「あ、あいつとは何もね……」

「で？どうなんだよ」

[illegible]

・ ・ ・ ・ ・
一 一緒に住む。

[illegible]

大山がかつてないほどの大声で叫んだ。

「Congratulations!」

「マジかよ」

「ふっ 藤巻君が僕より大人にいいいいいいいい」

「・・・チツくそっ こうやってちゃかされっ から言いたくねえんだよ!! 日向っ! おっ お前こそユイとどうなんだよ!」

「ああ俺も、ユイと……ああつ?!」

「どした？」

「わりい、俺、あいつ待たせたままだった

！！」

走ってどこかに向かう日向。

「なんだ、あいつ」

「さすがだね日向君」

「h e a r y u p！」

「ごめんっ遅れた！！」

息を切らせながら屋上のドアを開けた日向。

そこには・・・

「遅い！ー！ー！」

今にも泣き出しそうな顔の彼女がいた。

「もう ！ー！何やってたんですか！すぐ行くって言ったのに」

叩こうとするユイの手をとる日向。

冷てえな・・・

手を握ったままユイを見つめる。

「本当にごめんな。・・・あのさユイ」

「・・・なんですか？」

「俺と、一緒に住まないか？」

「・・・ふえ?! なんですかいきなり!」

「俺達、もういつもみたいに会えなくなるだろ? お前は部活あるし、俺は仕事。多分すれちがっちゃう。ずっと一緒にいてやるって言っただからさ。」

「・・・本当に?」

「ああ。アパート、駅の近くにしたいしお前もそのほうが通いやすいだろうしな。・・・どうだ?」

「……………」

「…ユイ？」

「……………ばか」

「んえ？」

「……先輩はずるいですよ。いつもいっつも突然とんでもないこと
言つて、私を……………」

「……幸せにして。バカ！ばか日向！！」

日向の胸に飛び込み泣き出すユイ。彼女の髪を撫でる日向。

「素直に嬉しいって言えばよ」

「……………うんはい！」

「……………寂しかった。先輩が、いなくなっちゃったの。……………私・
……………私」

「・・・うん。」

「先輩・・・」

「・・・ん？」

「ううおりゃあああああああああ」

「っぐはあああああああああああああ」

いつの間にか日向の後ろに回っていたユイは綺麗にジャーマンスン

プレックスを決めていた。

「っ殺す気か?!?!ここコンクリだぞ?!?!」

「るっせええ!」

嬉しすぎて、幸せすぎて・・・どうしたらいいかわかないよ

こんな毎日されたら死ぬんじゃないか、俺。

確かなモノ（後書き）

いっちゃいっちゃしとるなあ（笑）

ゆりっぺに大変なことした哀れなバカのおはなしはこのバカップル
を書き終えたら

始めようと思います。

L a s t S o n g (前書き)

卒業式のあとはうちあげかなあと。

未成年の飲酒はだめですよ。

Last Song

「おい日向、ユイ」

屋上から教室に戻ってきた二人に呼びかける一人の少年。

日向とユイは彼の方に向かう。

「なんだ？音無」

「夜にみんなで打ち上げするつもりなんだがお前らどうする？」

「打ち上げか・・・またゆりっぺのどこか？」

「ああ」

「だってよどうする？」

ユイに向き直す日向。

「いいじゃないですか行きたいです！・・・あつでも私だけ2年なのに行っちゃっていいんですか？」

「別に構わないぞ」

「やったあ」

嬉しそうにはしゃぐユイを横目でみながら

「ほんと好きだなこっこの」

音無が半ば呆れ顔で言う。

「ああ多分岩沢が来るからじゃねえか？」

「なるほどな」

持っていたノートを開き書き込む音無。

「・・・ひなユイ参加つと。よしっ」

「なんだよその呼び方・・・」

「えっお前知らなかったのか？みんなそう言ってるぜ」

「ええええ？！知らねえよ！！」

「卒業式の日に知ったのか・・・」

「おいユイ、知ってたか？」

「ふえ？何がですかー？」

「俺らがひなユイって呼ばれてたの」

「ええっ先輩知らなかったんですか?!」

「俺だけええええ　　!!」

膝を付く日向。

「そんなに嫌かあ?」

笑いながら言う音無。

「……はずいだろおが」

「どこでもイチャイチャしてたからなあお前ら」

「……………（更に縮む日向）」

「先輩ー鈍すぎっすよー」

バシバシと日向の背中を叩くユイ。

「……るっせ」

「まあまあいいじゃないか」

「よくねえよ!」

「じゃあ夜7時にゆりのとこで」

「はいつ了解です!」

「流すなよ!」

スタスタと歩いていく音無。

「音無先輩行っちゃいましたよー?」

「・・・はあ。まいいや」

「先輩、そんなに恥ずかしいんですかあ?」

「つたりまえだ。」

「ふーん」

じーっと日向を見つめるユイ。

「なんだよ」

「べつつにー」

「?」

「・・・鈍過ぎ。」

だんだんと生徒が減っていく教室。そんな中で妙なオーラを出して

いる二人はバカップル以外のなんでもないだろう。

そして約束の時間になりゆりの家に行く。

『喫茶 NAKAMURA』

ここが彼女の家。いつものたまり場である。

ドアを開けて入ると

「おっと見ない顔だね。旅の人かい？」

「ああ酒を一杯」

「パツリいイインおつと嬢ちゃんやってくれたな。テーブルが汚れちまったよ。その可愛い口で舐めて綺麗にしてくれよな」

「待ちな」

「なんだよてめっ・・・ぐおほお」

「うわああんた大変なことしてくれたなデスブコロス様のお怒りを買ってしまった！」

「デスブコロスってのはそいつか、文字通りブコロしてやる」

ってなんなんだよこれはああああ

「乗ってきて突っ込まないでよ」

「いや、つい癖で・・・」

なんてコントを毎回繰り返している変な集団だ。

「おおみんなきてんじゃん」

「おせーぞてめえら」

大きいテーブルの前に並んで座っているいつものメンバー。

「いやユイがぐずつちまつ・・・ぐほお」

脇腹をおもいつきり殴るユイ。

「ちょっとあなたたち夫婦喧嘩なら外でやってくれない？」

エプロンを付けたゆりは呆れ顔で言う。

「ちげえよ!」

「あーはいはいから座って」

諭されながら席に着く二人。目の前にはいつものメニューにはない様々な料理。

「全部ゆりっぺが作ったのか？」

「・・・あのバカが手伝ってくれたのよ」

「・・・へえ」

「なっなによ」

「いんやゝ別にいい」

ゆりの後ろからカップを持ってきた通称バカは

「おい貴様ゆりっぺに何してやがる」

今にも噛み付く勢いで日向に言う。

「なんもしてねえよバカ」

「バカとはなんだ!!」

「いいからあなたはキッチンに戻って」

「おう分かった」

日向はゆりにしか聞こえない声で

「幸せにな」

とつぶやく。

顔を赤くしながら

「・・・お互いね」

といってキッチンに戻っていった。

「先輩ゆりっぺ先輩になんて言われたんですか？」

隣に座ったユイは軽く睨みながら言う。

「なんでもねえよ」

「気になりますっ！」

「これでも食つとけ」

「んこっ」

近くにあったサンドイッチをユイの口に突っ込む日向。

「うつ・・・」

仕方なくもくもくと食べるユイ。 美味いからなここのサンドイッチ。

「よしみんな集まったかー」

音無の問いに歓声が上がる。

「3年間お疲れ様でした！！！！乾杯！」

「乾杯！！！！」

みんな近くの人とグラスを交わした。

「音無、おつかれさん」

「ああありがとな日向」

「俺は別になんもしてねえよ。生徒会長様程は。」

「いやそうでもないからさ」

「おい貴様僕の音無さんとなにしている」

小柄な少年は日向を睨みながら言う。

「お前来てたのかよ」

「当たり前だ。貴様こそなぜここにいる」

「二人ともやめろよ。今日は打ち上げだぜ？てか直井、僕のつて俺はお前のものじゃない」

「音無さん違うんですよこの愚民が」

まったく変わんねえな

「あつ音無君、今日の答辞よかったわよ」

エプロンのまま席に着いたゆり。

「そうか？」

照れたように笑う音無。

「おいっ高松なんで脱いでんだよ」

「この肉体美今さらさなくていつ晒すんですか」

「晒すんじゃない」

「おい肉うどんはまだなのか??!」

「Ikiss you!!」

「浅はかなり」

この騒がしい中に一人

「おい日向どうした？」

「いやなんでも・・・ただもうみんな揃わなくなるんだよなあってな」

「ああそつだな。だから今はめちやくちやに騒ぎたいんだよ」

「ばかな集団だけだな」

「まあな」

「音無は医大行くんだよな？」

「ん？ああ」

「頑張れよ」

「お前もな」

腕と腕を交わす男同士の挨拶。

「じゃあな親友」

「ってまだ始まったばかりだから。何二人ともしんみりしてんのよ」

「ゆりっぺにはわかんねえよ」

「はあ？いいからたくさん飲んでね！」

テーブルの上に置かれたものは・・・

「おいおい俺ら未成年だぜ？」

「いいのよ今日ぐらい」

「まったくアレが委員長の言うことが」

「まあいいんじゃないか」

「生徒会長だろ！！！」

数名のツッコミが入る。

そこから打ち上げ『飲み会』が始まった。

「朝まで飲み明かそうぜ―――」
「!」

「お―――」
「!」

「ユイは飲むなよ」

「えっなんで」

「お前には早い」

「ええー」

「ちょっとぐらいいいじゃないですかあゝ」

「ぜってえダメ」

「・・・チツ」

「舌打ちすんな」

前に飲ましたら酔っていろいろ大変なことになってたんだよ。俺の理性がもたねえ

「ほらこれやるから」

「わーいカニだあ……って」ラああああ

キューーン

急に響くマイクの音に皆が振り返った。そこには

「みんな、私達の高校最後のライブ聞いてくれよな」

「おおおおおお ！！」

我らがガルデモのラストステージが始まった。

機嫌の悪かったユイもすっかりテンションが上がっている。

「お前も行つてこいよ」

「ユイ、歌つか？」

岩沢にマイクを渡され戸惑いながらステージに上がったユイ。練習の時に以上に熱のこもったユイの歌声はここにいるみんなの心を揺さぶった。

歌い終わり、ライブが中盤に入ったとき

「……………うつふえええ」

ユイが泣き出した。

「どっとうしたユイ！」

隣にいた岩沢とひさ子と関根が近寄る。

「私……………みんなとバンドできてよかったです。毎日練習して、ひさ子さんと岩沢さんにいっつもダメだしもらって、ひさ子さんに怒られたりしたけど……………でも……………楽しかったです！！！」

「……………だからゆっゆいにゃんに任せれば来年もすごいバンド作……………ごほっごほっ」

泣きすぎてむせてしまう

「楽しみにしてるよ。ユイの新しいバンドと一緒にライブできるの」

岩沢がユイの頭を撫でながら言う。

「……うわあああみんなああああ」

「岩沢、もっと泣かしてどうする……」

「え？」

「さすが天然……ってなんでお前らも泣いてんだよ」
気づけば会場中が泣いていた。

「だってね最後だもん。私達」

「先輩たちと一緒にのライブ」

入江と関根も泣く。

「もうっユイにつられちゃったじゃん」

「……はあ。ほらみんな最後の曲いくよー!」

岩沢の一言で空気が変わり

「最後に楽しんでいこーぜ！」

ひさ子の一言でみんなの笑顔が戻る。

『M Y S O N g - . . . 』

離れ離れになってもみんなと繋がっていくもの。それはや
っぱり私たちが作ってきたモノ。

変わらずにはいられないけど、でも心は変わらないで

ほしい。

こんな人達が私にとっての支えなんだから。

大好きな大好きな人達なんだから。

L a s t S o n g (後書き)

うち上がっているのだろうか・・・

この面子書くとやっぱ騒がしいわ。
(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9684v/>

AngelBeats! Another peace story

2011年10月8日23時11分発行